

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門活動報告

【1】比較日本学教育研究部門運営委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、神田由築（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、藤川玲満（比較社会文化学）松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮尾正樹（比較社会文化学）、本林響子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成31年（2019）4月17日
- 第2回 令和元年（2019）5月22日
- 第3回 令和元年（2019）6月19日
- 第4回 令和元年（2019）7月31日
- 第5回 令和元年（2019）9月11日
- 第6回 令和元年（2019）10月9日
- 第7回 令和元年（2019）11月20日
- 第8回 令和2年（2020）1月15日

【2】比較日本学教育研究部門研究委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮下聡子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成31年（2019）4月17日

- 第2回 令和元年（2019）5月22日
- 第3回 令和元年（2019）6月19日
- 第4回 令和元年（2019）7月31日
- 第5回 令和元年（2019）9月11日
- 第6回 令和元年（2019）10月9日
- 第7回 令和元年（2019）11月20日
- 第8回 令和2年（2020）1月15日

【3】第21回国際日本学シンポジウム

テーマ「グローバル・ヒストリーと国際日本学」

主催：グローバルリーダーシップ研究所
比較日本学教育研究部門

日程：令和元年（2019）7月6日（土）

場所：お茶の水女子大学 本館306室

【挨拶】佐々木泰子（お茶の水女子大学理事）

【司会】小玉亮子（お茶の水女子大学）

【講演】

ジョーン・ピジョー（南カリフォルニア大学）

"What can Japan's history contribute to world history?"

【基調講演】

羽田正（東京大学）

「グローバルヒストリーと日本史」

【研究報告】

古瀬奈津子（お茶の水女子大学）

「東アジアにおける王権の古代から中世へ」

芹澤良子（お茶の水女子大学）

「衛生のグローバル化と日本」

本林響子（お茶の水女子大学）

「日本人の海外移住と日本語教育支援政策」

【4】シンポジウム実行委員会

古瀬奈津子（部門長）

小玉亮子（司会）

【5】第14回国際日本学コンソーシアム

テーマ「グローバル化と日本学II」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：令和元年（2019）12月9日（月）～10日（火）

場所：文教育学部1号館1階第1会議室

参加校：北京外国語大学北京日本学研究センター（中国）、南カリフォルニア大学（アメリカ）、ワルシャワ大学（ポーランド）、パリ・ディドロ大学（フランス）、国立台湾大学（台湾）、カレル大学（チェコ）、一橋大学（日本）、お茶の水女子大学（日本）

▽12月9日（月）

○開会式

【挨拶】古瀬奈津子（部門長）

○日本文学部会

【挨拶】佐々木泰子（お茶の水女子大学理事）

【司会】大村咲希（お茶の水女子大学）

羅小如（お茶の水女子大学）

「泉鏡花『黒百合』再考」

時新昊（国立台湾大学）

「日本古代における女性の恋愛観

—『万葉集』の女性歌人を中心に—」

ヴォザーバル・マテイ（カレル大学）

「『奥の細道』における歌枕の描写とその有無についての考察」

朱秋而（国立台湾大学）

「岡本花亭と李明五

—朝鮮通信使との交流をめぐる—」

ヴェーベル・ミハエル（カレル大学）

「『深い河』—遠藤周作の再発見」

范淑文（国立台湾大学）

「真杉静枝と温又柔の比較研究の試み

—グローバル化を視座にして」

▽12月10日（火）

○日本文化部会

【司会】原基香（お茶の水女子大学）

ジリアン・バート（南カリフォルニア大学）

「平安時代の教育史を考え直す：

藤原頼長の学問について」

グレン・イエンジェイ（ワルシャワ大学）

「島井宗室（1539-1615）に関する史料に見える武士との関係とその意味」

世川祐多（パリ・ディドロ大学）

「近世後期の江戸における武家の養子と身分

～滝沢馬琴を事例に～」

馬場幸栄（一橋大学）

「東京女子高等師範学校における天体暦計算動員の概要と背景」

トゥロフスカ・アグニェシカ（ワルシャワ大学）

「都市祭礼と神事としての佐原の大祭

—変貌する町とイベント—」

潘蕾（北京外国語大学）

「グローバル化時代の日本学研究

——中国の日本文化研究を中心に——」

○日本語学・日本語教育学部会

日本語学部会

【司会】池田來未（お茶の水女子大学）

クルボノヴァ・ムニラ（お茶の水女子大学）

「美容誌における外来語の特徴」

李月明（北京外国語大学）

「日中数量類別詞の範疇化機能の対照研究」

日本語教育学部会

【司会】チャニカー・チッタラーラック（お茶の水女子大学）

伊藤聖子（お茶の水女子大学）

「口頭産出と作文産出における主題化の違い

—I-JASにおけるST・SWを対象に—

マルタ・トロヤノフスカ (ワルシャワ大学)

『言語における世界観』の利用

—ポーランド語母語話者を対象とした丁寧語の効
果的な習得方法について—

大島弘子 (パリ・ディドロ大学)

「グローバルな認識とローカルな実践

—フランスの日本語教育の視点から—

○全体会・閉会式

【司会・挨拶】 古瀬奈津子 (お茶の水女子大学)

【6】コンソーシアム実行委員会

古瀬奈津子

(部門長、日本文化部会コーディネーター)

谷口幸代 (日本文学部会コーディネーター)

藤川玲満 (日本文学部会コーディネーター)

松岡智之 (日本文学部会コーディネーター)

神田由築 (日本文化部会コーディネーター)

宮内貴久 (日本文化部会コーディネーター)

石井久美子

(日本語学・日本語教育学コーディネーター)

本林響子

(日本語学・日本語教育学コーディネーター)

研究プロジェクト活動報告

1. 文理融合の食文化研究

- ①主旨：現在、世界中で「食」に対する関心が高まりつつあり、日本においても様々な角度から「食」の諸問題が議論されている。これらの議論の背景には、西洋科学文明の行き詰まりがある。「食」の現代的課題を解決するためには、世界的な視点で日本の「食」の問題を考えていく必要がある。また、数量化に象徴される栄養科学の視点からだけではなく、人文学からの視点を含めた複合的な文理融合の視点によって、「食」の問題に対処することが肝要である。本研究では、本学で研究・教育が蓄積されてきた国際日本学分野と食物栄養学分野の研究者・院生が合同で、これらの課題解決のために共同研究を行う。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：香西みどり（本学教員）、村田容常（本学教員）、神田由築（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、新井由紀夫（本学教員）
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：マクシム・シュワルツ（パスツール研究所）、シャルロット・フォン・ヴェアシュア（フランス国立高等研究院）
- ⑥研究協力員：野田有紀子（本学修了生）、矢越葉子（本学修了生）
- ⑦活動経過：
- (1) 授業等
- 文理融合リベラルアーツ「色・音・香」9「おいしさと色・音・香」を、古瀬、森光（食物）、安成（比較歴史）の3人により隔年で後期に開講してきた。来年度以降は、古瀬に代わり大薮海教員（比較歴史）が担当することに決まった。

2. 東アジアにおける古代末期の王権と儀式の比較的研究

- ①主旨：東アジアにおいては古代末期にあたる時期に、日本では院政が成立して院に権力が集中し、中国では唐宋変革期の皇帝権力が専制化するように、王権が権力集中することが知られている。本プロジェクトでは、なぜこの時期に王権の権力集中が行われるのか、権力集中化は儀式などの支配構造にどのような影響を与えたのかを比較史的視点から解明することを目的とする。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：古内絵里子（本学研究員）、東海林亜矢子（本学研究員）
- ④学内協力員：永井瑞枝（本学院生）、保田那々子（本学院生）
- ⑤客員研究員：金子修一（國學院大学）、石見清裕（早稲田大学）、桑野栄治（久留米大学）、大隅清陽（山梨大学）、藤森健太郎（群馬大学）、稲田奈津子（東京大学史料編纂所）、丁珍娥（韓国・祥明大学校）、ジョン・ピジョー（南カリフォルニア大学）
- ⑥研究協力員：野田有紀子（本学修了生）、重田香澄（本学修了生）、谷田淑子（本学修了生）
- ⑦活動経過：
- (1) 著書・雑誌論文等
- 古瀬奈津子「敦煌吉凶書儀的演變与日本的往来物」王振芬・榮新江主編『絲綢之路与新疆出土文献』中華書局、575-590ページ、2019年3月（昨年度の業績だが、2019年3月の段階ではまだ日本に届いていなかったため、本年度記す）
 - 矢越葉子「唐代的案卷与日本的継文」『絲綢之路与新疆出土文献』（前掲）、604-613ページ
 - 野田有紀子「平安貴族社会における女性の漢才

評価と書状』『お茶の水史学』63号、2020年3月

- ・古内絵里子「都城と農村の関係からみた古代東アジア都市の特質」『お茶の水史学』63号（前掲）
- ・保田那々子「平安朝服飾の途絶と復活—産着細長を例に一」『国際服飾学会誌』55号、2019年7月

(2) 学会発表等

- ・古瀬奈津子「東アジアにおける王権の古代から中世へ」第21回国際日本学シンポジウム「グローバル・ヒストリーと国際日本学」、2019年7月6日、於お茶の水女子大学
- ・ジョーン・ピジョー「What can Japan's history contribute to world history?」第21回国際日本学シンポジウム（前掲）
- ・矢越葉子「写経破紙と兌換稿」正倉院文書研究会第38回定期研究会、2019年10月26日、於奈良女子大学
- ・保田那々子「摂関期の幼帝の服飾」第28回国際服飾学会大会、2019年4月27日、於関西学院大学

(3) その他

科学研究費助成事業応募に向けて調整を行ったが、応募には至らなかった。

3. 明治・大正期の日独思想・文化交流の多角的研究

- ①主旨：北欧作家ラーゲルレーヴの日本における紹介者であるドイツの思想学者グンデルトと、その周辺の作家・思想家・知識人を中心に明治・大正期の独仏思想・文化交流を研究する。
- ②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）
- ③学内研究員：なし
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：加藤敦子（都留文科大学）、兼岡理恵（千葉大学）、中丸禎子（東京理科大学）

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

〔発表論文〕

田中琢三「バレス『デラシネ』におけるユゴーの葬儀」『お茶の水女子大学 人文科学研究』第16号、2020年3月

〔招待講演〕

木内堯「フローベールと大聖堂」、お茶の水女子大学仏語圏言語文化コース主催（於・お茶の水女子大学）、2019年12月12日

4. 英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

- ②プロジェクト担当者：香西みどり（本学教員）
- ③学内研究員：石井久美子（本学教員）
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：ポリリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学）、星野祐子（十文字学園女子大学）、福留奈美（東京聖栄大学）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：
昨年度までのデータ収集等を踏まえ、プロジェ

クトに関わる研究員が各自の成果を発表した年であった。

ザトラウスキー氏の企画により、星野、福留、石井、そして以前このプロジェクト担当者であった高崎みどり名誉教授（文教大学）を一部の分担執筆者として、書籍『五感で楽しむ食の日本語（仮）』（くろしお出版）を刊行することが決まった。現在までに、原稿の執筆と索引の作成を終えている。本書は来年度の春頃に刊行予定である。

また、客員研究員の福留氏が、修士論文「学習者と教師のためのオノマトペ基本語彙の選定と分類」（早稲田大学大学院日本語教育研究科）を執筆し、2020年度末に修士号の取得見込みである。

そのほか、今年度の本プロジェクトに関連する成果は下記のとおりである。

【学会発表】

・ Szatrowski, Polly. 2019. Use of negative questions in Dairy Taster Brunch conversations. Presented at the AATJ (American Association of Teachers of Japanese) 2019 Spring Conference. March 21. Denver, CO.

・ ザトラウスキー、ポリー2019「自然談話に見られる否定疑問文の形式、使用数、相互作用における機能」日本語学会2019年度春期大会（甲南大学2019.5.18）神戸

・ Szatrowski, Polly. 2019. Use of humor to create eating norms in Japanese Dairy Taster Lunches. Presented at the panel entitled “Humor and food in English, Japanese and German spontaneous conversational interaction” for the 16th International Pragmatics Conference. June 10. Hong Kong, CHINA.

・ 福留奈美「カフェにみる日本文化的要素：訪日外国人向けWEBマガジン「MATCHA」のカフェ情報を例にして」、日本ビジネスコミュニケーション学会2019年度年次大会, 2019. 7.13,早稲田大学

・ 福留奈美「日本語学習者に対する食べ物のおい

しさ表現の選択—オノマトペ基本語彙における取扱いの現状—」日本調理科学会 平成31年度大会研究発表, 2019. 8.27,中村学園大学

【共著書】

・ Szatrowski, Polly. (印刷中) Tracking references to unfamiliar food in Japanese Taster Lunches: Negotiating agreement while adapting language to food. The JAPANESE language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discourse, ed. by Andrej Bekeš & Irena Srdanović, 53-75. Ljubljana, Slovenia: University Press, Faculty of Arts= Znanstvena založba Filozofske fakultete.

【予稿集】

・ ザトラウスキー、ポリー2019「自然談話に見られる否定疑問文の形式、使用数、相互作用における機能」日本語学会2019年度春期大会予稿集 pp.73-80.

5. 少女雑誌にみる外来語の総合的研究

①主旨：明治末から昭和半ばにかけて発行された、少女対象の総合雑誌『少女の友』を資料に外来語を調査する。子ども向けに用いられている外来語というのは定着度が高く、当時、世代を問わずに用いられたと考えられる。それらがどのような特徴を持つのか、既存のコーパスや、当時刊行されていた外来語辞典との比較から明らかにする。

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③学内研究員：なし

④学内協力員：河野礼実（本学院生）、野口芙美（本学院生）、宇野和（本学院生）、ムニラ・クルボノヴァ（本学院生）

⑤客員研究員：なし

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

今年度は、本プロジェクトの2年目にあたる。昨年度に引き続き、研究材料である少女雑誌『少女の友』の収集を進め、大正時代の15年分

について、現時点で入手可能な資料すべてを揃えることができた。

同時に、アルバイトを募集し、収集した資料から外来語を抽出し、Excelにデータを入力する作業を進めた。

また、外来語を中心に抽出調査を行い、飲食に関する語の出現状況とその様相を明らかにした成果が、ポリリー・ザトラウスキー編集の『五感で楽しむ食の日本語（仮）』（くろしお出版）に、「大正期『少女の友』の食のことば」（分担執筆：石井久美子）として収録されることになった。本書の刊行は来年度の春に予定されている。

来年度は、外来語の抽出とデータ入力の作業を進め、完了させたい。さらに、研究会等での発表や論文投稿を積極的に行い、成果を発表していく予定である。

6. 現代における民俗学の再構築

①主旨：現代における民俗学の再構築を目指して、以下の三つの課題の実現を目指す。①先鋭化：民俗学の先人たちを乗り越え、新たな理論の構築を目指す。②実質化：民俗学において自明視されていた知的前提や技法を明晰に表現し、他分野との対話と開かれた議論の土台を作り出す。③国際化：国際的な広がり前提とした日本民俗の把握を推し進めるとともに、世界各国の民俗学との交流を確立する。

②プロジェクト担当者：宮内貴久（本学教員）

③学内研究員：なし

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：飯倉義之（國學院大學）、及川祥平（成城大学）、川田牧人（成城大学）、川森博司（神戸女子大学）、島村恭則（関西学院大学）、菅豊（東京大学）、塚原伸治（茨城大学）、徳丸亞木（筑波大学）、野口憲一（日本大学）、俵木悟（成城大学）、古家信平（筑波大学）、渡部圭一（筑波大学）

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

・研究会「アートの民俗学的転回、民俗学のアート論的転回」

日時：2019年12月15日（日）13：00～

会場：東京大学東洋文化研究所大会議室

コーディネーター：菅豊（東京大学大学院情報学環・学際情報学府）

司会：塚原伸治（茨城大学人文社会科学部）

発表者：福住廉（美術評論家、東京芸術大学非常勤講師）「アートの民俗学的転回」、菅豊（東京大学）「民俗学のアート論的転回」

コメンテーター：加藤幸治（武蔵野美術大学教養文化・学芸員課程研究室）

・研究会「写真探して4万キロ・米国調査報告会」

日時：2019年11月17日（日）14：00～17：00

会場：東京大学東洋文化研究所大会議室

コーディネーター・司会：菅豊（東京大学）

発表者：佐藤洋一（早稲田大学社会科学総合学術院教授・東京大学東洋文化研究所私学研修員）

・研究会「現代民俗学は「地域」と「むら」をどう捉えるかー〈共〉の民俗学を考える」

日時：2019年11月16日（土）14：00～17：00

会場：成城大学8号館831教室

コーディネーター：加藤秀雄（成城大学）

総合司会・趣旨説明：加藤秀雄

発表者：植田今日子（上智大学）「『地縁』は構築できるか」、猪瀬浩平（明治学院大学）「しがらみを編みなおす：障害者の地域生活運動の分解と異化」

コメンテーター：金子祥之（跡見学園女子大学）

・研究会「まちをまなざす、まちをかたるー都市をめぐる学際的な対話に向けてー」

日時：2019年10月27日（日）13：30～17：00

会場：東京理科大学 神楽坂キャンパス1号館3階136教室

コーディネーター・趣旨説明：木村周平（筑波大学）

司会：門田岳久（立教大学）

発表者：早川公（大阪国際大学）「『まちづくりのエスノグラフィ』 解題」、三隅貴史（関西学院大学）「『まちづくりのエスノグラフィ』を民俗学から読む」、石樽督和（東京理科大学）「『戦後東京の闇市』 解題」、木村周平「『戦後東京の闇市』を文化人類学から読む」

- ・研究会「民俗学的「差別」研究の可能性ー「日常」からのアプローチー

日時：2019年8月25日（日）13：30～17：00

会場：成城大学3号館321教室

趣旨説明：今野大輔（成城大学民俗学研究所）

発表者：入山頌（障害をこえてともに自立する会）「「路地」で暮らすためにー東京都国立市公民館コーヒーハウスにおける「障害」と「青年」ー」、岡田伊代（荒川区立荒川ふるさと文化館）「皮革産業は「部落産業」でしかないのかー東京都墨田区の皮鞆し業を事例とした再検討ー」、辻本侑生（民間企業勤務）「いかにして男性同性愛は「当たり前」でなくなったのかー近現代鹿児島事例分析ー」

コメント：川松あかり（東京大学大学院）、桜木真理子（大阪大学大学院、日本学術振興会）

総司会：及川祥平（成城大学文芸学部）

コーディネーター：及川祥平・辻本侑生

7. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

A comparative study of philosophy, ethics, religion and scientific thought

- ①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交

換によって幅広い視点から問題を考察する。

- ②プロジェクト担当者：高島元洋（本学名誉教授）、中野裕孝（本学教員）、宮下聡子（本学教員）
- ③学内研究員：三浦謙（本学教員）、荒木夏乃（本学非常勤講師）、吉田杉子（本学非常勤講師）
- ④学内協力員：清水真裕（本学院生）、大持ほのか（本学院生）、飯田明日美（本学院生）、阿部雅（本学院生）
- ⑤客員研究員：頼住光子（東京大学）、徐翔生（台湾・政治大学）、森上優子（文部科学省）、木元麻里（文部科学省）、斎藤真希（静岡大学）、小林加代子（中京大学）、清水恵美子（茨城大学）
- ⑥研究協力員：鈴木朋子（首都大学東京）
- ⑦活動経過：

本年度は、本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的に開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会を開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行っている。メンバーは客員研究員の森上優子氏、清水恵美子氏、学内研究員の鈴木朋子氏である。今年度も多くの思想家を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として、輪読会を不定期に3回開催した。日本倫理思想史上で注目したい文献について、その解釈を検討し合った。本年度は、折口信夫『古代研究Ⅰ 民俗学篇Ⅰ』を対象とした。中心となるメンバーは研究協力員の荒木夏乃氏、学内協力員の清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏である。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探求すべく『古事記』本文を精読する研究会を6回開催した。日本思想の経験豊富な専門家、若手研究者、大学院生、それ以外にも西洋哲学、宗教学の研究者といった幅広い層の参加者が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、本居宣長『古事記伝』、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探求した。主なメンバーは中野裕考氏、大久保紀子氏である。

8. 天文計算を支えた日本の女性たち

①主旨：電子計算機が導入される以前の日本では、天文計算は算盤・計算尺・手廻し計算器などを用いて行われていた。そして、その膨大な計算作業の多くは女性たちによって支えられていた。なぜ天文計算が「女性の仕事」とみなされていたのか。そして、どのような経緯で彼女たちは天文計算の仕事に就いたのか。緯度観測所や東京女子高等師範学校などの歴史資料調査および関係者へのインタビューから、近代日本の天文計算を支えた女性たちの歴史を学際的（史料研究・科学技術史・ジェンダー研究・教育史）に考察する。

②プロジェクト担当者：新井由紀夫（本学教員）

③学内研究員：宮内貴久（本学教員）

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：馬場幸栄（一橋大学）

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

本年度は、東京女子高等師範学校・緯度観測所・水沢高等女学校における第二次世界大戦中の天体暦計算動員を中心に、女性が担当した天文計算について資料調査および聴取調査を実施した。また、その成果を以下の集会・講演会・展示・番組等で発表した。

- ・馬場幸栄「水沢緯度観測120周年記念 第2代所長川崎俊一の業績と人柄」『国立天文台ニュース』No.310, 2019年5月1日, 9-10頁.
- ・馬場幸栄「東京女子高等師範学校に設置された水路部分室の勤務体制」, 日本天文学会2019年秋季年会, 2019年9月13日, 於：熊本大学黒髪キャンパス.
- ・馬場幸栄「緯度観測所の応召記念写真に記録された水路部水沢分室」, 日本天文学会2019年秋季年会, 2019年9月13日, 於：熊本大学黒髪キャンパス.
- ・馬場幸栄「木村栄と緯度観測所」, 国立天文台水沢創立120周年記念展示, 2019年12月1日, 於：奥州市文化会館.
- ・馬場幸栄「東京女子高等師範学校における天体暦計算動員の背景と状況」, 国際コンソーシアム「グローバル化と日本学Ⅱ」, 2019年12月10日, 於：お茶の水女子大学.
- ・馬場幸栄「緯度観測所と奥州の人々」奥州FM『胆江ふるさとノート』, 2019年12月11日.
- ・馬場幸栄「緯度観測所の歴史 明治から戦後まで」, 国立天文台水沢創立120周年記念展示, 2019年12月14日-21日, 於：奥州宇宙遊学館.
- ・馬場幸栄「水沢VLBI観測所（旧緯度観測所）創立120周年記念 木村栄の生涯—前編」『国立天文台ニュース』No.317, 2019年12月1日, 3-9頁.
- ・馬場幸栄「水沢VLBI観測所（旧緯度観測所）創立120周年記念 木村栄の生涯—後編」『国立天文台ニュース』No.318, 2020年1月1日, 7-13頁.

9. 観光の比較社会史

Comparative social history of tourism

①主旨：観光は現代人にとって欠かせない娯楽として馴染みが深いものである。しかし歴史的に

みてみると、観光が人々にとって身近になったのは決して古いことではない。特に、現代のような自由かつ長距離の往来が難しかったと考えられる前近代においては、ごく一部の階層により行われるものであった。それがなぜ広く一般大衆に親しまれるものになったのであろうか。さまざまな時代や地域の事例を比較・検討することで、人々と観光の関係の変遷を考えてみたい。

Tourism is familiar as an indispensable entertainment for modern people. But historically, it has never been long ago that sightseeing has become familiar to people. In particular, in the pre-modern era where it was considered difficult for free and long-distance traffic like the present age, it was done with only a few layers. Why was it widely popular with the general public? I would like to think about the transition of relations between people and sightseeing by comparing and examining examples of various times and regions.

- ②プロジェクト担当者：大藪海（本学教員）
- ③学内研究員：古瀬奈津子（本学教員）、新井由紀夫（本学教員）、阿部尚史（本学教員）
- ④学内協力員：池田美千子（本学AA、放送大学・東洋大学非常勤講師）、巽昌子（本学特別研究員）
- ⑤客員研究員：なし
- ⑥研究協力員：内田滯子（放送大学非常勤講師）
- ⑦活動経過：

(1) 日本・西アジア・西洋それぞれの地域において行われていた観光やそれに類似する行為（旅など）について、プロジェクトメンバーが各々専門とする時代を中心に検出を行い、各地域において人々はどのように「観光」してきたのか、その目的は何であったのか、さらにはその行為が社会にもたらした影響などを具体的に検討した。

(2) それらの事例の比較・検討のためミニシンポジウムを開催し、地位や階層こそ異なるけれ

ども普遍的に行われてきた「観光」について、地域による相違や現代との相違について意見を交わした。

10. 近現代における日本文化の総合的研究

- ①主旨：これまで近現代の日本文化に関する研究は各分野において進められてきたが、分野間の交渉は稀薄であり、研究の蓄積にしたがって日本文化の総合的な理解はむしろ困難になってきたように思われる。そこで本研究プロジェクトでは、近現代における日本文化の形成・変容について、各分野の知見をふまえつつ多面的に検討することにより、日本文化の歴史的・現代的特性を明らかにすることを目指す。具体的には特に、政治、思想、経済、教育、生活などの多様な視点から、近現代の日本文化に対する捉え方・歴史観を見直し、一連の分析結果を総合することによって新たな研究の視点や論点を模索することとする。
- ②プロジェクト担当者：難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）
- ③学内研究員：宮尾正樹（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、石井久美子（本学教員）
- ④学内協力員：加藤恭子（本学院生）、加藤絵里子（本学院生）
- ⑤客員研究員：鈴木淳（東京大学）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：

(1) 学会・研究会等

◆日本家政学会第71回大会（2019年5月24～26日、於四国大学）

同大会に参加し、被服部会にて研究発表（難波知子「戦後日本における母親の服装規範の形成—子どもの入学式・卒業式に出席する母親の装いに注目して」）を行った。戦後の洋服普及の過程において、学校行事に参加する母親の礼装規範、特に和服と洋服のダブルスタンダードが形成され、メディアが提供する情報や保護者

(母親)間の相互作用により、服装の画一化(ユニフォーム化)が引き起こされる現象を考察した。

◆第58回近世史サマーセミナー(2019年7月13~15日、於国民宿舎良寛荘、岡山県倉敷市)

同セミナーに参加し、全体会にて報告(湯川文彦「中央・地方からみた幕末維新の経験」)および討論を行った。報告では、新政府が幕府・藩の統治経験を高く評価する一方、自らの経験不足を埋め合わせるため、議会や学校といった新たな仕組みに期待をかけていたことを明らかにした。また、明治維新について、度々旧来の政府・民間の経験が再評価・活用されるとともに、そこからの脱却が展望されるという特性を見いだした。

◆教育史学会第63回大会(2019年9月28~29日、於静岡大学)

同大会に参加し、第1分科会にて研究発表(湯川文彦「地方における学制の解釈と運用」)を行った。これまで机上の空論、非現実的な大典と目されてきた明治5年学制が、実際には地方学事において現実の問題に即して解釈・運営されていたことを、長崎県の事例にもとづいて具体的に明らかにした。

(2) その他

- ・湯川文彦「明治10年代における法的承認と教育令改正」(『日本の教育史学』第62集、2019年10月)
- ・湯川文彦「書評 小幡圭祐著『井上馨と明治国家建設—「大大蔵省」の成立と展開—』」(『歴史評論』第837号、2020年1月)
- ・湯川文彦「太政官制研究の論点」および文献年表(小林和幸編『明治史研究の最前線』筑摩書房、2020年1月)
- ・湯川文彦「文明開化と習俗のあいだ—地方議会の議論と役割に注目して—」(『お茶の水史学』第63号、2020年3月)
- ・湯川文彦「明治前期における地方学事経験—長

崎県庁の学制施行に注目して—」(『人文科学研究』第16巻、2020年3月)

- ・難波知子「富岡製糸場における女子作業服の変遷」(『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』、2020年3月)

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門 年報研究論文投稿規定

本年報はお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門の年報である。

1. 掲載資格

- ・研究論文：投稿資格を有するのは原則として本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。
- ・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

2. 原稿の査読

- ・研究論文については、査読を行う。

3. 締切

- ・研究論文は10月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し、12月に開催されるものについては別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載することとする。

4. 提出先

- ・論文は事務局に提出する。その他、問い合わせがある場合、事務局へ連絡する。

5. 書式

- ・原稿は、規定の書式（22字×38行 2段組み）に基づき作成する。

- ・原稿の種類・枚数は以下の通りとする。

研究論文：15枚以内

講演・パネル原稿：10枚以内

研究発表：6枚以内

総括・概要：2枚以内

（いずれも、本文・注・図表を含む）

- ・B 5判横書きWord原稿、22字×38行、本文2段組み

- ・余白：上下25mm、左右17mm

- ・フォントは下記の通りとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック体
英文	Times New Roman	Arial

- ・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央
副題は9ポイント「明朝体」左右中央

- ・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ

- ・本文（図表・注・参考文献・資料）

- ・本文：9ポイント「明朝体」

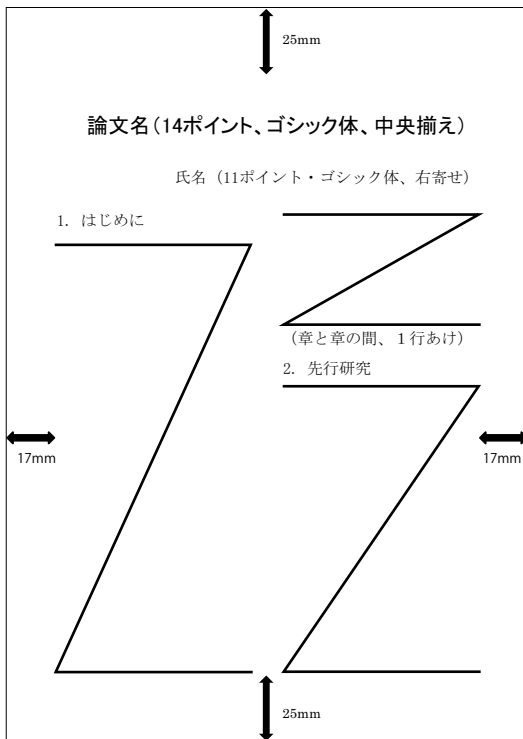
- ・注：8ポイント「明朝体」

- ・参考文献：8ポイント「明朝体」

- ・用紙サイズ：B 5判（182mm×257mm）

- ・章と章の間のみ、1行あける。

- ・図表内の文字もできるだけ、本文に準じる。
本文との間を1行以上あけること。



6. 原稿提出方法

- ・ Word原稿を添付ファイルで送付する。
- ・ メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。

7. 使用言語

- ・ 使用言語は日本語とする。但し、何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。

8. 校正及び注意点

- ・ 内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は1校のみとする。
- ・ 事務局は原則として校正を行わない。
- ・ 校正は原則、電子媒体を通して行う。
- ・ 論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。

・ 以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。

- (a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。
- (b) 内容的に研究論文とは見なせないもの。
- (c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。
- (d) 極めて煩雑な組版上の操作が必要であるもの。

9. その他

- ・ 研究論文執筆者には、雑誌刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。
- ・ 著作権などの処理は原則として執筆者が行う。
- ・ 年報に掲載されたものは原則としてWeb (Tea Pot) 上で公開される。Webでの公開を希望でない場合は事前に事務局へ連絡する。
- ・ 同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報のほうをオリジナル原稿とする。

第22回国際日本学シンポジウムのお知らせ

【日程】

2020年7月19日（日）13時～17時

【開催場所】

お茶の水女子大学本館3階306室
(東京都文京区)

【共催】

国立歴史民俗博物館

【全体テーマ】

高度経済成長期における食生活の変化

高度経済成長期は、家電製品が都市部の団地世帯から早く、やがて農村部へと普及し、1960年版『厚生白書』によれば「都市部ではテレビ44.7%、電気洗濯機40.7%、電気釜31.0%であるのに対して、農村部では、いずれもまだ約10%程度にすぎず、都市部の方が圧倒的に早かった」とある)、生活様式の合理化、洋風化が進んでいった時期である。

かつて民俗調査の主たる研究対象であった民具ではなく、家電製品が生活の中心となっていき、冷蔵庫や電気炊飯器、ガスコンロ、トースター、ホットプレート、ミキサー等々の普及は、食品の冷蔵保存や調理の簡便化と新しい料理の普及にもつながった。またテレビによる新しい料理の紹介なども行われるようになり、食生活の洋風化や「冷たいおいしさ」の浸透など大きく変化した。生活の変化に関して、生活改善普及事業に着目する研究があるが、家電製品の普及や生活様式の洋風化は生活改善運動の結果というよりも、NHK「きょうの料理」に代表される料理番組や各種婦人雑誌などメディア、それに加えてアメリカのホームドラマなどの影響のほうが大きかったので

はないかとも推測される。

この時代に特徴的な食生活の変化について、(1)冷蔵庫やガスコンロ、電気炊飯器などの台所用品の普及とそれによる食の変化、(2)インスタント食品の利用や外食、中食の購入など食の外部化、日常食から儀礼食まで手作りから購入へという変化、(3)学校給食と子供の食の実態（おやつの変化を含む）、を中心に議論していく。

〈登壇予定〉

コーディネーター 関沢まゆみ氏
(国立歴史民俗博物館)
宮内貴久
(お茶の水女子大学)

講演 カタジーナ・チフィエルトカ氏
(ライデン大学)

パネリスト 村瀬敬子氏 (佛教大学)
武井基晃氏 (筑波大学)
宮内貴久 (お茶の水女子大学)

最新の情報は、グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門ホームページ (<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/index.html>) にてご確認ください。

(文責：宮内貴久)

バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号、及び『比較日本学教育研究部門研究年報』第14・15号の在庫は以下の通りです。

ご注文、お問い合わせは下記までご連絡ください。

メールアドレス ccjs@cc.ocha.ac.jp (グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門)

号	残部	価格 (送料別途)
第1号	約25部	1,000円
第2号	約30部	1,000円
第3号	約30部	1,000円
第4号	約5部	1,000円
第5号	約5部	1,000円
第6号	約60部	1,000円
第7号	約50部	1,000円
第8号	約5部	1,000円
第9号	約25部	1,000円
第10号	約15部	1,000円
第11号	約50部	1,000円
第12号	約40部	1,000円
第13号	約10部	1,000円
第14号	約45部	1,000円
第15号	約60部	1,000円

なお、『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号、及び『比較日本学教育研究部門研究年報』第14・15号は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション(<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>)にて公開されています。こちらをご覧くださいませ幸いです。

お知らせ

- ・『比較日本学教育研究部門研究年報』は今年度ISSNを取得しました。
- ・投稿規定の一部を改訂しました。研究論文については、来年度より査読を行います。奮ってご投稿下さい。
- ・国際日本学コンソーシアムにご参加いただきました、パリ・ディドロ大学は、2020年1月よりパリ大学と名称が変わりました。

編集委員より

国際日本学シンポジウムおよび国際日本学コンソーシアムの掲載論文の題目は、一部、発表時と異なるものがあります。著者の方から提出された原稿の通りに掲載しました。また、一部の執筆者は要旨のみの掲載となっております。表記などについては編集の都合上、編集委員の方で統一させていただきました。

『グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』
2019年度編集委員 田中琢三 松岡智之 加藤絵里子 芹澤良子

* 本年報は、「グローバル女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成」による成果の一部です。

